金子みすゞさんの心　　vol.32

2026年11月
野毛山幼稚園

もくせい

金子みすゞ

もくせいのにおいが
庭いっぱい

表の風が、
御門（ごもん）のとこで、
はいろか、やめよか、
相談してた。

2026年10月20日　読売新聞朝刊編集手帳に次のような記事が載っていました。

インフルエンザを警戒してのことだろう。電車のボックス席に座るお父さん、お母さん、そしてふたりのお子さんがマスクをしていた◆コロナが流行した当時に本誌に載った時事川柳を思い出す。〈マスク越しキンモクセイに深呼吸〉(三浦健)甘い香気を放つキンモクセイの咲く季節になった。お天気情報サイト「ウェザーニュース」によると、この秋、その花が東日本を中心に二度咲きしているようだという。◆同じ木の中で花芽が時間差で開く場合があるそうで、調査したところ、関東で44%の人が「二度咲き」と答え、「三度咲く以上」といた回答も 16%あった◆同サイトには何年か前にも二度咲きの報告が寄せられ、当欄で取り上げられたことがある。キンモクセイにも当たり年のようなものかもしれない。

そしてその後、上記のみすゞさんの詩が紹介されていました。
編集手記に書かれているコロナ禍の読売新聞。思い返すと、2024年10月の園のたよりにそのことについて掲載していました。それは地球温暖化の影響があるのではないかとありましたが、そんな素敵な自然のプレゼントならばいいなと思ったものでした。 その時に紹介した詩です。

「冬の金木犀（きんもくせい）」　長田 弘

秋、人をふと立ち止まらせる
甘いつよい香りを放つ
金色の小さな花々が散って
金色の雪片のように降り積もると
静かな緑の沈黙の長くつづく
金木犀の日々がはじまる
金木犀は、実を結ばぬ木なのだ。
実を結ばぬ木にとって、
未来は達成ではない
冬から春、そして夏へ
光をあつめ、影を畳んで
ひたすら緑の充実を生きる、
葉の繁り、重なり。
つややかな
大きな金木犀を見るたびに考える
行為じゃない
生の自由は存在なんだと。

キンモクセイの花の香りを嗅ぐ母子。毎年見かける光景です。
立ち止まらないと感じることのできないことです…
立ち止まって、空を見上げたり、深呼吸をしたりしてみてはいかがでしょうか。